

## 第6回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<高校の部 優秀賞>

### 「私の生きる意味」

平形唯真

心臓の鼓動が妙に感じられる。ドクドクと体中に響いて、しだいに涙が出そうになる。それをこらえようとするとう無性に悲しくなる。私が自分の存在を考えるとこんな気持ちになることが多い。

人は何かしら取り柄があるものだと思はれる。しかし、その取り柄は発揮されなければ意味がない。芸能人は、周りを明るくし、愛されるという才能があり、頭の良い人は皆から尊敬され、誰かの役に立つ才能がある。取りえも、人に普段見られないと劣等感を抱くばかりだ。

私は劣等感を抱いてばかりいる方の人間である。考えていても無駄だと思いつつ、自分がいることで何かメリットなどあるのかと考えてしまう。

ある日、仕事でほとんど家にいない父と久々に話した。話題がなくなって、沈黙が流れる。私はつい声に出してしまった。

「……私、生きてて何か意味ある？」

「は？」

父は驚いた顔をして私を見た。

「いや、最近何となく思うんだよね。」

別の話題にしようと思ってあたふたした私に父は言った。

「何言ってるんだ。少なくともお前は二人の人間の生きがいになってる。俺とお母さん。お前がいなかったらこんなに仕事も頑張らないって。」

優しく、明るく笑いながらそう言った。私は泣きそうになるのをグッとこらえた。いつも一緒になくても私を信じ、私のためにと生きてくれる大切な人がいる。家族の大切さをとてとても、強く感じた。

もう私は以前のような不安に心が暗くなることはなくなった。たとえ不安になったとしても、私には、信じてくれる人がいる限り大丈夫だ。